



Title	「ほんとうの」と発話レベルのカテゴリー形成
Author(s)	大久保, 朝憲
Citation	大阪大学言語文化学. 1997, 6, p. 19-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78089
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「ほんとうの」と発話レベルのカテゴリー形成

大久保 朝憲 **

Le présent article est une analyse sémantique des expressions épithétiques en japonais «hontôno» et «honmonono» (équivalents approximatifs en français : *vrai*, *véritable*) qui semble concerner l'adéquation du choix du substantif modifié par une de ces expressions. De notre point de vue pour cette analyse, les activités langagières sont considérées comme des processus de la catégorisation, et la catégorie est vue ici comme un ensemble des représentations cognitives que l'on peut décrire par une expression linguistique. Le but principal de la présente étude est de faire remarquer l'importance qu'il y a à voir notre catégorisation non pas comme stable et fixe, mais comme dynamique et souple au niveau de l'énonciation. Il y a longtemps que ce que l'on appelle «la théorie du prototype» est appliquée à la linguistique, mais on critique aussi cette tendance en disant que le concept «prototype» est lui-même ambigu et que l'on en abuse pour expliquer tous les phénomènes non-dichotomiques. Nous appliquons les «modèles cognitifs (idéalisés)» de Lakoff (1987) au problème de la catégorisation, mais vue comme celle qui est faite au niveau de l'énonciation, c'est-à-dire pour chaque acte de l'énonciation. Nous montrons ainsi que l'effet prototypique est produit au moment de l'énonciation, par le fait qu'il existe plus d'un modèle cognitif activable pour la conceptualisation d'une catégorie, et que «hontôno» est une

* «Hontôno» et la catégorisation du niveau de l'énonciation (Tomonori OKUBO)

** 言語文化研究科博士後期課程、社会科学高等研究院 (E.H.E.S.S., Paris) 第三課程

本稿執筆に関して、書簡の形式で詳細にわたるコメントをいただいた水田洋子氏に心からお礼を申し上げます。また、本文中のあらゆる不備は、言うまでもなく筆者の責任によるところである。

expression qui spécifie un ou des membre(s) central/-aux de la catégorie ainsi établie. Enfin, à travers cette analyse, nous essayons d'élucider l'importance de la façon de penser de la catégorisation du niveau de l'énonciation pour les recherches linguistiques.

1 はじめに

われわれの言語活動とは、カテゴリー形成の過程であるとする考え方がある。ここで言うカテゴリーとは、ある言語表現（たとえば「ネコ」）によってとらえることができる認知表象の総体（通りを横切る動く物体から、こどもが描いた絵のネコにいたるまで）のことで、これは、われわれがとらえる世界に関するさまざまな知識（百科事典的知識）に基づいている。このようにして形成されるカテゴリーのメンバーには、そのメンバーとしてより典型的に思われるものとそうでないものといった違いがあらわれ、このような観点にもとづくカテゴリー論が、Rosch 以降の認知心理学の実験・研究成果（参考文献欄参照）にもとづき、「プロトタイプ理論」と一般に呼ばれている。これは言語学の分野にも頻繁に適用されているが、Lakoff (1987) らも正しく指摘しているように、「プロトタイプ」の概念そのものがいまいなまま、非二分法的な分析においてこの用語が濫用されているという見方も否定できない。

本稿では、上記のようにカテゴリー形成の過程として言語活動をとらえるという観点に立って、「ほんとうの」、「ほんものの」を中心に、名詞句の修飾表現として修飾される名詞の選択の適切性に関与するような表現¹⁾の意味論的分析をおこない、その分析を通じて、われわれのカテゴリー形成が一定不変なものではなく、発話のレベルでさまざまな形をとる動的なものであることを主張する。

2 「ほんとうの」をめぐる問題

¹⁾ その他「正真正銘の」、「まぎれもない」、「れっきとした」、「正規の」、「本～」、「実の」、「真の」、「～そのもの」、「～以外の何でもなし」など。またこの意味で、本稿では「ほんとうの話」のように、「話」という語のあらわすカテゴリーそのものではなく、この語によってあらわされる内容が「事実にもとづいた、実在の」という意味で使用されるケースには言及しない。

本稿であつかわれるような表現の意味論的重要性については、英語においては、Bolinger (1972) や、Lakoff (1973) の「ヘッジ」表現についての分析にさかのぼる議論がある一方で、日本語については、水田 (1996) をのぞいたくわしい研究はみあたらないようである。われわれの問題意識は、このような表現の存在自体に関する素朴な疑問に端を発している。たとえば「ネコ」という語を発話するときには、ある認知表象をそのカテゴリーに属するものと判断しているのだと考ええると、「ネコ」と言われるものはすべてネコなのだから、「ほんとうの」、「にせの」といった特定化の必要性は感じられない。ところが、われわれは「ほんとうのN (名詞)」タイプの表現を頻繁に耳にし、また、そこで理解されるものの性質も一様ではない。いくつかの例を見てみよう²⁾。

- (1) この人形には、ほんとうの髪の毛が使っています。
- (2) パリで、もう 10 件ばかりためしてみたけど、この店ほどおいしくて、ちゃんとしてるところはないよ。ここではほんとの日本料理が食える。絶対だから。
- (3) 日本での生活を考えると、ただこうやってサンドイッチとかを毎日庭にパラスル立てて食べたりする、こういうのがほんとのぜいたくだよね。

上の各例で使用されている「ほんとうの」が特定するものは、「天然のもの」であったり (①)、「正統的なもの」であったり (②)、さらにもっと主観的な基準によるものであったり (③) と一様ではない。また、「ほんとうのN」と言うときに、そこでの特定からはずされたもの、すなわち「ほんとうではないN」はカテゴリーのメンバーなのかそうでないのかといった問題が生じる。

われわれは、「ほんとうの」は、カテゴリーNにプロトタイプ効果をもたらし、そのカテゴリーの中心的なメンバーを特定する修飾表現であるという考え方をとっている。このことについて詳しく述べる前に、次章ではまず、「カテゴリー」や「プロトタイプ」などの概念についてのわれわれの理解を簡単にまとめておく。

3 カテゴリー形成と認知モデル

²⁾以下の例では、「ほんとうの」と「ほんとの」を、本稿の議論に大きな影響をおよぼす意味的な違いをもたらすものではないとみなし、区別なく用いる。

われわれは、カテゴリーは、それを形成する人間の認知能力と独立に存在しているのではなく、人間が世界をとらえる際に活性化される認知モデルに依存しているという考え方をとっている。このような考え方は、Lakoff (1987) によって提案され、彼は特にこれを理想認知モデル *idealized cognitive models* と呼んで、さまざまなカテゴリー形成に関する分析をこころみている。われわれが単に「認知モデル」とよぶものも、その基本的な考え方においては Lakoff の理想認知モデルに一致しているが、われわれは特に、発話のたびごとに、文脈に応じてさまざまなしかたで活性化されるものとしての側面を重視している。

このことについて、しばしば引き合いにだされるカテゴリー「鳥」の例で考えてみよう。「鳥」と言えばスズメやハトであって、ペンギンやキウイが頭にうかぶことはない。またスズメやハトは、その形態や、「飛ぶ」といった「鳥」に典型的と思われる特徴をそなえている。したがって、カテゴリーへの所属は必要十分条件的な属性によってきまるのではなく、「らしさ」にもとづく境界の曖昧なものである、といった説明が、プロトタイプ理論についてなされることが多い。しかし、このような説明はしばしば誤解のもとであり、そうは言ってもペンギンもキウイも生物学的には鳥であって、スズメやハトにおとるところはなく、ペンギンとコウモリの間にははっきりとした境界があるではないか、といった「理にかなった」反論をうけることになる。われわれの観点からこの問題をとらえなおすと、これは、カテゴリー「鳥」のとらえられかたが一様ではないことに由来している。生物学的分類が関与してこない日常的な文脈での発話では、それに応じた形でカテゴリー形成をおこなうための認知モデルがあって、そのモデルの中では、カテゴリー「ペンギン」とカテゴリー「鳥」はそれほど容易には結びついていない。このモデルの中では、鳥は飛ぶものであり、そのためにからだに対して一定の大きさの翼があって、といった、生物学上では存在しないような別の基準が加えられている。一方、われわれは通常、生物学的分類というものも知っており、そのような分類上では、いま述べたような基準が問題にされないことも知っている。これは、「科学」があたえる認知モデルによって世界をとらえることであり、またこのモデルは、しばしばある種の権威さえもつことがある。このようにして、ペンギンは、あるモデルによると「鳥」であり、また別のモデルによれば「鳥」ではないのに対し、スズメは、それらの両方のモデルで問題なく「鳥」である。そこで生じるのがプロトタイプ効果であるというのが、われわれのこの概念に関する理解である。プロトタイプ理論に関する誤解の源は、この理論ではしばしば、

カテゴリー形成に関して必要十分条件に基づくモデルが完全に否定されているかのように語られることによる³⁾。

このように、カテゴリーとは不変の知識ではなく、発話の際にその文脈にもとづいて活性化される認知モデルの活性化の度合いによって、一回一回の発話のたびごとに形成されるものだ、とわれわれは考えている。「文脈自由の解釈」というものが語られるとすれば、それは、「多くの文脈でしばしば活性化される認知モデルによる解釈」という程度問題でしかなく、「科学モデル」のようにしばしばその地位をあたえられるようなモデルがあったとしても、その一般性は絶対ではない。このような考え方では、いわゆる比喩的な表現や、ある種の誇張表現なども、そのようなカテゴリー化を可能にする認知モデルによるものであるという言い方ができる。次の例で簡単にふれておこう。

(4) 猫は動物じゃありません。

(5) きみのお母さんは動物だ。

まず、(4)については、これがある熱心な愛猫家の発話で、猫をけものとしてはかの動物と同じようにあつかう聞き手に対して、そうではない、猫は、知的で、繊細で、人間と同じだといった内容をつたえるための発話として解釈可能であろう。つまり、これはカテゴリー「猫」に関する科学的知識にもとづいた一般的理解による認知モデルに対する挑発として、愛猫家によってとらえられた世界に関する認知モデルによるカテゴリー形成を提示している発話であると分析することができる。つまり、一般的で凡庸な認知モデルに対する独自のカテゴリー化の提示で、これは、隠喩などのいわゆる修辭的な発話一般にみられることである。つぎに、(5)については、これが小学校の理科の授業での教師の口からでたもので、科学モデルにもとづいたカテゴリー形成では、人間もまた「動物」であるということを理解させるための発話であるという解釈が考えられる⁴⁾。つまり、これは(4)とは逆に、ごく日常的な会話での認知モデルでとらえられたカテゴリー「動物」に対して、科学的モデルによるカテゴリー化を対峙させている。教師は、発話の際に、聞き手の母親の生物学的特徴以外を捨象したような認知モデルで世界をと

³⁾ プロトタイプが「効果」であることは、Lakoff (1987) でも強調されている。

⁴⁾ もちろん、非常に野性的な聞き手の母親についての発話という隠喩的な解釈も可能。

らえてこのように発話しているのである。ここで注意すべきは、この二つの発話がともに、聞き手を困惑させるという意味である種同様の「修辭的」効果をもっているのに対して、一方では科学モデルが否定され、他方ではそれが主張されているという点である。

また、このような例についてその「文字通りの」意味に基づく分析というのは不可能である。たとえば(4)について、文の意味としては「猫は動物でない」と言っているが、発話レベルでは、「猫は動物であると言えないくらい人間に近い」といった内容が伝達されているのだ、とする解釈では、(4)の端的な発話の強さが弱められてしまい、このような直喩的なパラフレーズによる解釈を聞いた愛猫家が、「たとえ話で言ったわけではない」と怒りだすのも想像にかたくない。つまり、このような分析では、逆に「発話の意味」はそこなわれてしまうのである。

4 「ほんとうのN」：カテゴリーNの中心メンバー

さて、カテゴリー論に関する上記のような観点から、「ほんとうのN」また「ほんもののN」に関して考えてみよう。上にもふれたように、「ほんとうの」も「ほんものの」も、問題のカテゴリーに関する認識にプロトタイプ効果をもたらし、その中心メンバーを特定する表現であるとわれわれはとらえているが、後者の「ほんものの」に関しては、意味的にさらに別の要素が加わっていることも、この章であきらかになる。

前章の議論でもあきらかなとおり、あるカテゴリー形成に関わる認知モデルがひとつしかなかったら、そこにプロトタイプ効果が生じることはない。「ほんとうの」のような表現は、このような複数の認知モデルが問題になるケースで類纂にあらわれる修飾表現で、いずれにしてもプロトタイプ効果をしめすあるカテゴリーの中心的メンバーを特定するのであるが、どのような認知モデルがその効果に関与しているかによって、見かけ上さまざまな解釈をうながすのである。以下いくつかの事例を分析してみよう。

4.1 ほんものにとせもの；「ほんとの一万円札」

紙幣、宝石、芸術作品、あるいは皮革、木材などには、しばしばその模造品が存在し、その存在理由は社会的な要因による。これらの模造品は、多くの場合非

常に巧妙にできているが、常に何らかのかたちで「ほんもの」と識別可能でなければならず、それが「にせもの」であることの必要十分条件である。一方、「にせの一万円札」、「人工の真珠」、「合成皮革」といった表現は、これらの模造品が、真正ではなくともカテゴリーのメンバーとして認められていることをあらわしている。「にせの一万円札」は「にせ」でも「一万円札」なのであり、「人工の真珠」も「人工」でも「真珠」と呼ばれ、以下同様である。つまり、このようなタイプのカテゴリーでは、その模造品もそのカテゴリー内に含めるような認知モデルがあるのだが、別の認知モデル、たとえば鑑定家の厳しい認知モデルでは、模造品のほうはカテゴリーに含まれないということもおこる。このようにして、これらのカテゴリーに関しても、真正のものを中心メンバーとするプロトタイプ効果が生じることになる。そこで、その中心メンバーを特定する表現として「ほんとの」がもちいられ、「ほんとのN」によって模造品でないものが特定される。Nの模造品（「にせのN」）もカテゴリーNに含まれるというこのような見方は、つぎのような例からも裏付けられる。

- (6) a. こちらはにせの一万円札、そしてこちらは一万円札です。
 b. こちらはにせの一万円札、そしてこちらはほんとの一万円札です。
- (7) a. A: この人形の髪の毛、つくりものでしょ。
 B: いえ、これは髪の毛ですよ。
 b. A: この人形の髪の毛、つくりものでしょ。
 B: いえ、これはほんとの髪の毛ですよ。

(6a) が (6b) にくらべて発話としてすわりが悪いのは、ここでは模造品もカテゴリー「一万円札」に含まれているために、単に「一万円札」と言うだけでは、その真／偽の地位が判然としないからである。そのために、そのカテゴリーにおける中心メンバーである「ほんとの一万円札」という特定がここでは必要となる((6b))。 (7) の例はもっと明解で、まずAは、自分が模造品だと思っているもののことを「髪の毛」と言っており、それに対して、それが天然のものであることを言うためには、(7a) のBのように単に「髪の毛」というだけでは答えにならず、(7b) におけるように「ほんとの」によって、模造品も加えたカテゴリー「髪の毛」の中心メンバーを特定しなければならないのである。ところで、ここで問題にされているようなカテゴリーについては、その中心メンバーをあらわす表現として

「ほんと（う）の」よりも「ほんものの」のほうがなじみやすいということが気づかれるかもしれない。これについては、これらの表現にかかわる認知モデルの性質が問題になる。この節のはじめに、模造品であるための必要十分条件として、「ほんもの」との識別可能性を指摘しておいた。このことと、これらのカテゴリーに「ほんものの」が「ほんとうの」よりなじみやすいこととは無関係ではなく、中心メンバーを特定するための認知モデル（厳しいモデル）が、明示的な必要十分条件に基づく（と考えられている）モデルであることが、「ほんものの」の使用を可能にし、そちらをより自然なものとさせるのである。水田(1996)では「ほんものの真珠」が言えて「ほんものの友だち」とは通常言いにくいことが指摘されているが、これは、カテゴリー「友だち」に関するこのような認知モデルができにくいからであり、また、これも水田の例だが、広告コピーに見られる「本物のコーヒー」のような表現がその威力をもつのは、カテゴリー「コーヒー」の中心メンバーたる自社のコーヒーをほかの雑多のコーヒーから明示的に区別できる必要十分条件的なモデルの存在（という想定）が、自社コーヒーの「絶対性」を強調することになるからである。これを「ほんとうの」にすると、いくぶんその方は弱まってしまうことになる。

4.2 社会的ステレオタイプ；「ほんとうの言語学研究」

ここで言う「ステレオタイプ」とは、社会的・文化的な文脈の中で、典型的で、頻繁にみられるカテゴリーのイメージのことを言う⁵⁾。「日本人」は小柄で眼鏡をかけていて背広姿、「フランス映画」はせりふが多くて内容も複雑で話の展開がはっきりしないなどといったイメージがそれにあたる。カテゴリーに関するこのようなステレオタイプを含む認知モデルは、当然プロトタイプ効果をもたらし、ステレオタイプに合致するメンバーがカテゴリーの中心メンバーととらえられることになる。

(8) A：ビリヤードを少しやるけど。

B：ああ、でもビリヤードっていうのはほんとのスポーツじゃないでしょ。
ほかにスポーツ何もしないの。

⁵⁾ 「プロトタイプ」に関する誤解の多くは、このステレオタイプとの混同にある。

A：高校のときバレーボール...

B：あ、それはほんとのスポーツだ。

- (9) たとえば、動詞の時制とアスペクトについての研究なんていうのは、ほんとの言語学研究だろうけど、隠喩についての研究とかはちょっとねえ。

「スポーツ」や「言語学研究」に関して、われわれは社会的なステレオタイプをもっていて、それを中心メンバーとするようなカテゴリー形成がなされる。その上で「ほんとの」が使用されることになるのだ。また、ここで「ほんとの」を使用している話し手は、これを用いず、単に「～はスポーツじゃない」、「～は言語学研究でない」といった言い方をすることもできる。その場合には、話し手はステレオタイプに基づく認知モデルのみをカテゴリー形成のために使用することになり、このような言い方に特に強く感じられるある種の「偏見」のニュアンスはこのような事情による。

また、ステレオタイプがカテゴリーの最適・最良例と結びつくと、「ほんとの」の使用はより効果的になる。

- (10) 山田さん、あのひとはほんとの言語学者だね。あの人の言うことはいつも明解で、すじが通ってるし、理論もちゃんとデータに基づいてるもんだからな。
- (11) (=2)) パリで、もう 10 件ばかりためしてみたけど、この店ほどおいしくて、ちゃんとしてるところはないよ。ここではほんとの日本料理が食える。絶対だから。
- (12) 最近の大型ハリウッド映画っていうのは、どれもほんとの映画じゃないね。ああいうのは、いわば金のかかったテレビドラマのたぐいだ。

4.3 「実物」と表象；「ほんとのエッフェル塔」

カテゴリー理論に関して興味深い見解をしめしている尼崎 (1990: 148) も指摘しているように、たとえば、「椅子」のようなカテゴリーに関して、「腰をおろすもの」という定義では十分でないのは、これだけではソファやベンチなど同機能のほかのものから区別できないだけでなく、紙の上にかかれた椅子の絵や、模型の椅子、椅子の写真などを見てもわれわれは通常それらを「椅子」と呼べるこ

を説明しないからである。これらのものは「椅子」の表象であって「椅子」そのものではない、という説明はもちろん間違っていないにせよ、カタログの椅子の写真を見て「この椅子の写真があらわす椅子にしようよ」と言わずとも「この椅子にしようよ」ですんでしまうのもまた言語的事実である⁶⁾。ある言語表現によってあらわされるカテゴリーは、その言語表現によって言及できるあらゆるものをふくんでおり、ある物理的実体と、その表象がともに同じカテゴリーに含まれるのは、ほんものにとにせものの一万円札などの例とさほど違うものではない。そして、「椅子の模型は『椅子』じゃないでしょ。」といった発話が一方で可能なことから、表象を排除するカテゴリー形成をうながす認知モデルも当然可能で、その結果、表象ではない「実物」は、プロトタイプ効果をしめす広いカテゴリー形成の中では中心メンバーとなる。そこで、以下のような発話での「ほんとうの」の使用が理解されるのである。

- (13) 昨日の昼過ぎ、まるっきり偶然に道のまん中でほんとの曙みちゃったんだよ。からだはあのとおりでかいし、着物でしょ、一発でわかっちゃうよな、あれは。
- (14) A: いいか映画のスタジオを見てきたわけでも、仮装パーティでもなかったんだ。みちゃったんだよ、ほんとの宇宙人、道のまん中で。
B: その『ほんとの宇宙人』に会うのに、お前どんくらい飲んだの。

(13) は、固有名詞に「ほんとの」がつく例だが、このような例は、固有名詞の指示対象がテレビの画面や、新聞紙上などで「表象化」され、そのような諸表象も含む形でカテゴリー形成がなされているからこそ可能になるパターンである。「宇宙人」についても、その信憑性はともかく、話し手にとっての「実物」としての宇宙人が中心メンバーとされ、その表象としての仮装、絵に描かれたものなどとともにプロトタイプ効果をしめすカテゴリーを形成している。そして、Bの発話がしめすように、このようなAのカテゴリー形成に対する聞き手の解釈は自由である。また、「実物」と表象との区別は、「ほんもの」と「にせもの」の区別と同様明示的に可能な場合が多く、その際は、4.1 節のケースと同様、「ほんもの」も使用可能となる。

⁶⁾ このような問題については Fauconnier (1984) にくわしい分析がある。

- (15) パリについて三週間後にやっと（写真や絵はがき、Tシャツの図柄などではなく）ほんとの／ほんもののエッフェル塔を見た。
- (16) かれは、30歳ではじめての海外旅行で空港に行くまで、（おもちゃやテレビの映像としてではない）ほんとの／ほんものの飛行機を見たことがなかった。

4.4 強調表現的；「ほんとのぜいたく」

「よろこび」や「ぜいたく」など、一般に抽象名詞と呼ばれ、メンバーとして物理的実体をもちえないようなカテゴリーでは、その中心メンバーを特定するための明示的な認知モデルがない場合が多い⁷⁾。したがって、ある認知対象が「ぜいたく」であるかどうかということは、いかなる認知モデルによってみても、大なり小なり主観的・相対的にならざるをえず、その上で、ある認知モデルによる「ぜいたく」をカテゴリーの中心メンバーとみて「ほんとうのぜいたく」ということは、対立するモデルがはっきりしていない場合、しばしば単に強調表現的に聞こえる。

4.5 「れっきとした大学教授」と「バットマンそのもの」

前節までの考察以外にも、「ほんとうの」の使用をうながす認知モデルはさまざまな形であらわれるが、それらすべての用法についてここで分析する余裕はない。ただ、ここで、「ほんとうの」の意味機能をよりよく理解するために、関連する二つの表現についてごく簡単にふれておこう。

ひとつめは「れっきとした」という修飾表現で、これはメンバーとして曖昧なところはないということを主張する点では「ほんとうの」に近い意味合いを持つが、ある認知モデルではメンバーからはずされ、プロトタイプ効果の中で周辺的・とみなされるようなメンバーも、別の「強い」(科学モデルや、法に依拠するモデルなど) 認知モデルでは、メンバーたるに何の問題もないことをしめすような、いわばプロトタイプ効果をくつがえそうとするような表現である。「クジラも

⁷⁾このようなカテゴリーが本質的にプロトタイプのカテゴリーであるとする研究としては、Coleman and Kay (1981) のカテゴリー「うそ」("lie") についての分析などがある。

「れっきとした哺乳類だ」という発話では、「哺乳類」というカテゴリーに関して、しばしば「陸生動物で、四肢が発達している」といった属性を含めてしまうような認知モデルに対して、科学モデルではそのような属性は考慮されず、クジラもイヌやウマと同資格でこのカテゴリーに属していることが、「れっきとした」によって表現されている。また、社会的ステレオタイプにははずれていても、別の強い認知モデルでは問題なくメンバーであるような例としては、「Tシャツにジーンズ、あれでもれっきとした大学教授なんですよ。」といった発話が考えられる。

ふたつめの例は、形態的にはいわゆる「形容詞句」ではないが、名詞修飾表現の一種と考えられる「Nそのもの」という表現である。この表現は、「真剣そのもの」、「健康そのもの」など、いわゆる形容動詞の語幹について、とらえられている事態がカテゴリー「真剣」、「健康」の中心的メンバーであることをしめす点では「ほんとうの」に近いが、興味深いことに、この表現にはある種の隠喩的な用法がある。「あの仮装ぶりはバットマンそのものだった。」のような発話では、話し手が問題の人物とバットマンとを区別できなくなってしまうわけではない。かと言って、この発話と、「…バットマンそっくりだった。」のような発話は等価ではないことも直観的に知られる。ここでは隠喩的なカテゴリー形成をうながす認知モデルが活性化されているのである。「そのもの」という表現のために、見かけの類似のみによってカテゴリーのメンバーとして認められるような認知モデルが活性化され、問題の人物とバットマンは同じカテゴリー「バットマン」を形成する。その中心メンバーは当然バットマンその人であるはずなのだが、カテゴリーの中心メンバーを特定する表現「そのもの」が、あえて本人以外のメンバーに適用され、類似性の程度の強さを効果的に表現できるようになるのである⁸⁾。隠喩的なカテゴリー形成は、一般的に活性化されやすい認知モデルの「常識」を破りつつ、何らかの動機づけがあるところで理解可能性をたもつことができるような認知モデルにもとづいており、この点が、新奇な認知モデルに基づかず、いわば「常識」の範囲で類似性などをしめす表現をとまなう直喩との重要な相違点である。「バットマンのような人」はカテゴリー「バットマン」のメンバーではないが、「バットマンそのもの」である人はカテゴリーに含まれるばかりでなく、その中心メンバーとしてとらえられている。

⁸⁾ 「本物以上によくできている」と言った表現も同様のカテゴリー形成によると考えられる。

5 おわりに

以上の考察から、カテゴリーの形成のしかたが発話レベルで柔軟に変化し、ここで問題にした「ほんとうの」などの表現は、そのようなカテゴリー形成がしばしばプロトタイプ効果をしめすことを裏付けるものであることがあきらかになった。そして、いくつかの具体事例で見たように、このプロトタイプ効果の性質も一定不変のものではなく、発話の際に活性化される認知モデルに依存していることも検証することができた。言うまでもなく、「認知モデル」についてはさらに理論的な精緻化が必要であるが、ここでは特に発話理解に直接関与するものとしてのその重要性を指摘したい。

参考文献

- 尼崎 彬 (1990) 『ことばと身体』 勁草書房、東京
- BOLINGER, Dwight (1972) *Degree Words*, The Hague - Paris : Mouton.
- COLEMAN, Linda, and Paul KAY (1981) «Prototype Semantics : the English Word *Lie*», in *Language*, 57, no. 1, Linguistic Society of America.
- FAUCONNIER, Gilles (1984) *Espaces Mentaux*, Paris : les Edition de Minuit.
- HEIDER (ROSCH), Eleanor and Donald C. OLIVIER (1972) «The Structure of the Color Space in Naming and Memory for Two Languages», in *Cognitive Psychology* 3, 332-354, Academic Press.
- KAY, Paul (1983) «Linguistic Competence and Folk Theories of Language : Two English Hedges», in *Proceedings of the Ninth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 128-137, Berkeley : Berkeley Linguistic Society.
- LAKOFF, George (1973) «Hedges : A Study in Meaning Criteria and the Logic of Fuzzy Concepts», in *Journal of Philosophical Logic* 2, 458-508, Dordrecht : Reidel Publishing Company.
- LAKOFF, George (1987), *Women, Fire, and Dangerous Things - What Categories Reveal about the Mind*, Chicago - London : The University of Chicago Press.
- MERVIS, Carolyn B. and Eleanor ROSCH (1981) «Categorization of Natural

Objects», in *Annual Review of Psychology*, 32, 89-115.

水田 洋子 (1996) 「『本当の』をめぐるカテゴリー考」 in 日本認知科学会第 13 回
大会論文集

ROSCH, Eleanor (1973) «Natural Categories», in *Cognitive Psychology* 4, 328-350,
Academic Press.